

平成28年度  
ひらめき☆ときめきサイエンス～ようこそ大学の研究室へ～KAKENHI  
(研究成果の社会還元・普及事業)  
実施報告書

HT28199

補助犬と共にリハビリお助け隊 ～障害適応の作業療法プログラム



開催日：平成28年8月20日

平成28年8月21日

実施機関：岐阜保健短期大学

(実施場所) 岐阜保健短期大学学生ホール

実施代表者：原 和子

(所属・職名) リハビリテーション学科作業療法学専攻特任教授

受講生：小学生5名、中学生4名、高校生2名

関連URL：<http://news.gifuhoken.ac.jp/article/441257285.html>

【実施内容】

【プログラムの留意、工夫】

補助犬と共に暮らすことが障害者のリハビリテーション、特に作業療法として有効であることを学ぶ為に、PBL(Problem Based Learning: 問題解決型学習)チュートリアル形式で進めた。一般のPBLでは、小グループごとに事例提示、課題確認、論点と仮説検証、中間発表、自己学習、グループ討議、最終発表という段階をとるが、時間の関係で、まず補助犬三種(介助犬、聴導犬、盲導犬)のデモと講義を行い、次にグループ討議、発表と続けるハイブリッドPBL方式とした。

小学生(5.6年生)、中学生は補助犬事例シナリオを参考に「補助犬はロボットとどこが違うか」、高校生は「補助犬と共に行う作業療法」をテーマにまとめ、発表した。小グループに1名のチュートリアルとして岐阜保健短期大学作業療法学専攻学生(1、2年生)が参加した。チュートリアル以外の作業療法学専攻学生はPBLでのグループ活動をし、参考として発表にも参加した。

事例シナリオの理解のために、小学生・中学生・高校生自身による障害体験機会を作った。昼食時にアイマスクをして食事をする経験時、隣の生徒が食卓のどこに何があるのか説明する支援役割体験をし、次に役割交代した。盲導犬との歩行、杖での歩行を比較体験した。聴覚障害体験では耳栓を用いた。聴導犬体験は、様々な音源(目覚まし、赤ちゃんの泣き声等)を知らせてもらう経験をした。補助犬ユーザー(聴覚障害者、視覚障害者)がこれに助言した。肢体不自由者体験では対麻痺として車椅子での移動、自助具あるいは自力で落ちたものの拾い上げなどを体験し、補助犬との作業と比較できるようにした。

手話通訳およびガイドヘルパーの協力を得、手話によるコミュニケーションの実際、ガイドヘルパーの役割を参加者に伝えた。



## 【当日のスケジュール】

平成 28 年 8 月 20 日、21 日両日に亘り開催された。両日とも朝 10:00 より受付、11:00 より開講式を行った。オリエンテーションでは、今事業が日本学術振興会の主催であることの説明がなされた。午前中を使い、「犬と作業療法」というテーマで講義を行った。昼食時には視覚障害体験として参加者にアイマスクをしてもらい、食事をした。同時に介助のための情報提供の方法として、時計の文字盤を想定した説明方法を学んでもらった。

午後からは参加者に介助犬、盲導犬、聴導犬の役割及びその違いを理解してもらい、デモ犬によるデモンストレーション及び体験を行った。

その後、「補助犬とロボットはどこが違うのか(小中学生向け)」、また「補助犬と共に行う作業療法」(高校生向け)というテーマで、グループワーク(PBL 発表)及びグループ発表を行った。

事業の最後には、参加者に「未来博士号」を授与し、賞状の授与を行った。

- 10:00～10:30 受付(岐阜保健短期大学学生ホール)
- 10:30～11:00 開講式(あいさつ、オリエンテーション、科研費の説明)
- 11:00～12:00 講義「補助犬と作業療法(講師:原 和子)」(途中 10 分休憩)
- 12:00～13:00 昼食(教職員・日本聴導犬協会・中部盲導犬協会職員を交えて)
- 13:00～14:00 実習「介助犬・盲導犬・聴導犬の仕事(日本聴導犬協会、中部盲導犬協会)」
- 14:00～15:00 グループワーク(PBL:問題解決型学習による)&ティータイム  
小5・6、中学生テーマ「補助犬はロボットとどこが違うか」  
高校生テーマ「補助犬と共に行う作業療法」
- 15:00～15:20 PBL 発表準備 (PBL=Problem Based Learning)
- 15:20～16:00 PBL 発表
- 16:00～16:30 修了式(アンケート記入、未来博士号授与)
- 16:30 終了・解散

## 【実施の様子】

両日の参加者とも、普段接するペットとしての動物以上の能力により驚き、また感動しながら体験することができたようだった。

盲導犬との歩行体験



介助犬による落ちた物の拾い上げデモンストレーション



## 聴覚犬により目覚ましを知らせてもらう体験



### 【事務局との協力体制】

限られた期日の中で、教職員が疎通を図り、よりよい事業とできた。

### 【広報活動】

岐阜県内岐阜・西濃地区の小中学校にパンフレットを送付。また近隣の高校には直接出向いて、本事業を広報した。また、地元ラジオ番組で、事業の開催をアナウンスしていただき、広報した。

### 【安全配慮】

参加者はもちろん、実施協力者として盲導犬ユーザーの方が参加されたので、当日大きな事故につながらないよう安全に配慮した。またソフト面からは万一の事態に備え、参加者及び付添者、実施者側、実施協力者全員に傷害保険に加入した。結果、本事業は無事終了することができた。

### 【今後の発展性、課題】

実施者側、参加者側共に、事後のアンケート調査を行ったところ、今後も本事業の毎年開催等を希望すると答えたアンケートが多数あった。



今後の発展性:「生き物」である補助犬は、福祉機器やロボット機能のモデルとなってきた経緯があり、これからは変化する世の中への個別的適応モデルを提供できると思われる。児童、生徒達への教育的視点からは、補助犬との作業的関わりを通して、自我意識及びコミュニケーション能力が育成され、意志選択できる自立した社会人となるための支援となることが期待される。

作業療法では、作業への「意志」が動作、行為、生活への発動となるとされ(人間作業モデル理論)、それ無しには補助犬との関わりの中かで「犬との信頼関係」と「犬に命令する、操作する」ためのコマンドができない。

「意志」の要素には「興味」「価値」「個人的原因帰属」があり、それらがしっかりしていないと作業の「選択ができない」「やる気がない」等、作業遂行障害の原因となる。結果、「ひきこもり」「不登校」「ニート」など、昨今の社会問題となっている作業遂行障害と言える状況を引き起こしていると推測される。補助犬には目的動作や生活、仕事の補助を明確に伝える必要があるため、自分の意志と作業選択を決断しなければならない。一般に児童、生徒にとって、犬には対人間よりも安心して自分の意志を伝えられるため、コミュニケーションの模擬学習機会となり得る。

#### 今後の課題:

以下の質問が出され、補助犬に直接たずさわる仕事(獣医師、トレーナー等)以外でも、補助犬の普及に関わることができるとの理解を共有できた。

1. 作業療法士は障害や疾病があっても「したいことがある」「することがある」「期待されている」人であることへの支援をするという意味で、補助犬をリハビリテーション医療の中に位置づける。特に高齢化社会では耳が遠くなった方のための聴導犬、見えにくくなった方のための盲導犬、体力が衰えて引きこもりがちになった方のための介助犬の活躍が期待される。そのような意義がまだまだ知られていないために日本での普及は欧米に比べて著しく遅れている。完全に聞こえなくなってから、全盲になってから、寝たきりになってからでは遅い。しかし、比較的障害が軽いうちは訓練を受ける機会や認定を受ける資格がない。
2. 補助犬の訓練を受けられる年齢は日本では 18 歳以上、また高齢者には認定時、様々な制限が課せられている。
3. 誰もが広く補助犬をもつことができるためには、医療、福祉の法律改正が求められるため行政、立法、司法の仕事も重要になる。
4. ロボットに代表される福祉機器や義肢装具の開発において、そのモデルは生きている補助犬とユーザーである障害者の共同関係となる。ロボットと補助犬は対立関係にあるのではなく相互共生関係にあるとあってよい。理工学系への進路希望者へのメッセージとしてエビデンスを蓄積する必要がある。
5. 小中学生、高校生は夏休みのスケジュールを早めにたてているようなので、広報について、できるだけ早めにプレスリリースを検討する。

#### 【実施分担者】

廣渡 洋史 リハビリテーション学科作業療法学専攻 教授  
宇佐美 知子 リハビリテーション学科作業療法学専攻 講師  
廣田 薫 リハビリテーション学科作業療法学専攻 助教  
中根 英喜 リハビリテーション学科作業療法学専攻 助教  
藤井 雅也 リハビリテーション学科作業療法学専攻 助教

【実施協力者】 \_\_\_\_\_ 28 名

#### 【事務担当者】

森山 章 岐阜保健短期大学 短大事務局長  
澤田 博重 岐阜保健短期大学 課長